

を改めて深く受取ることが出来るならば、宗祖の教学を確実に人類へ向って伝える、原理と方法を見出す手掛りになりはせぬかと思ふのである。

太子信仰と親鸞聖人

小 島 叡 成

太子信仰については、既に太子薨後百年頃に成る『上宮聖徳法王帝説』『日本書紀』にも明らかな所であるが、将しくは平安初期の『聖徳太子伝暦』に至って具体化せられたものと考えられる。即ち太子薨後、飛鳥・白鳳時代には太子偉徳への思慕・敬慕が主体なりしものが、漸次理想化・神秘化せられ『伝暦』出現と共に偶像化・神秘化を促進し、鎌倉期に至るや無教各宗が競って太子を自宗の祖として自宗化せんとし、又親鸞・凝然・明恵・解脱・叡尊等の真摯な学匠による太子研究もあり、太子信仰の黄金時代を迎え多くの造像が行なわれ、太子は仏陀的・権者的性格を持つに至つたのである。かくて室町期に及び漸次民衆化せられ本尊的性格を具え、諸芸の祖として尊崇せられる事となつたのである。これが徳川期に至るや増々大衆化せられ文芸的な面に迄浸潤し、太子への信仰は祭司的・儀式的なものとなり、他面儒者・国学者・神道者による太子批難も活潑に行われ、明治維新後更に自由な学問的・批判的立場より新しく太子再認識の傾向が現われ今日に至っている。

然らばかかる太子神秘化の原因は何れにありやというに、これ太子の偉徳に起因する事は勿論であるが、その他 (1)太子薨後僅か二十二年にして上宮王家が滅亡した事 (2)『伝暦』の相伝が秘義化せられた事 等の理由が考えられる。又その根本的意図として石田茂作氏も指摘の如く、太子を大聖至尊に擬して日本救済の超人的大聖として景仰せんとした、太子信仰の時代的反響によるものと考えられるのであつて、我が聖人も「和国の教主聖徳皇」と讃仰せられ、ここに教主とは「教主世尊」即ち釈迦如来の意に外ならないと思う。而してその太子信仰の代表的なものとして

(1)親身身説 (2)恵思再誕説 (3)未來記 等が数えられるのであるが、これについては拙著『聖徳太子伝暦摘解』に譲る事としたい。

- 次に親鸞聖人の太子信仰については、その生涯を一貫するものであるが、特にその宗教的廻心の転機が太子と深い関係のある事が注意せしめられる。
- (1) 建久二年 九月十四日 磯長廟參籠 (高田正統伝)
 - (2) 建仁元年 二十九才 六角堂參籠 (恵信尼文書 後序)
 - (3) 建仁二年 二月廿二日 四天王寺・磯長廟參籠 (高田正統伝)
 - (4) 建仁三年 四月五日 六角堂觀音夢告 (御伝鈔 上三)
 - (5) 元久二年 七月廿九日 夢告 (改名・教行信証 化卷末六要)
 - (6) 建長八年 二月九日 蓮位夢想 (御伝鈔 上四)
 - (7) 康元二年 八月九日 夢告和讃 (正像末和讃 初)
- 八十五才

更に聖人御述作中、特に太子に関係あるものについて、

- | | | | | |
|-----|------|--------|------------|-------|
| (1) | 建長七年 | 十一月三十日 | 太子和讃(七十五首) | 專修寺本 |
| | | 八十三才 | | |
| (2) | 康元二年 | 二月三十日 | 太子和讃(百十五首) | 願永寺本 |
| | | 八十五才 | | |
| (3) | 同 | 三月一日 | 正像末和讃(起草) | 專修寺本 |
| | | | | |
| (4) | 正嘉元年 | 五月十一日 | 上宮太子御記(書写) | 西本願寺本 |
| | | | | |
| (5) | 正嘉二年 | 六月廿八日 | 尊号真像銘文(広本) | 專修寺本 |
| | | 八十六才 | | |
| (6) | 同 | 九月廿四日 | 正像末和讃(脱稿) | 同 |

右によって知り得られる事は、聖人晚年特に太子景仰の旺盛なりし事実にして、これ八十四才長子善鸞義絶の事件と思ひ合わせる時、この骨肉の惨事は丁度血縁の太子と馬子の関係に似たものがあり、夢殿に籠られし暗年の太子を偲びつつ、いよいよ太子に同感せられし、我が聖人の御心底を伺うに充分なものがあると考えられる。

選択集の短序と恵空本選択集

佐々木 求 己

選択集の序は平基親の手になり、それに短序と長序の二種があるが、短序が原型であり、長序は鎮西の義山の改竄により出来たものであり全く原型を失なったものなる事は周知の如くである。

而して、この短序も、現在散失版となっている建暦二年版には

恐らく存在したと思われるが、現存の諸版には全く存在せず、只元禄七年に光遠院恵空により開版された本にのみ印刷されている事は学界の定説である。この恵空版は建暦、延応等の諸古版により校訂刊行されたものなる事がその註記に見へ、建暦版にのみ存在したと思われる建暦元年の平基親の序を原型に於て印刷してある事により、内容的には大きな疑問を残しつつも、恵空は建暦版を突見したのであらうと考えられて居り、それを以て、元禄頃に建暦版の存在した一史証とさえするのである。

この建暦版の事は良忠の選択集弘決疑鈔に見え、降つては元禄の西山の竹林寺昌堂の選択集校輯要義鈔、又、義山校刻本にも見えるが、その短序は、法然院藏延応版の上巻表紙にある室町頃の墨書と、新知恩院藏の永享十一年版に見える室町頃の墨書以外には見える処がない。

併し、平基親の短序は恵空によって元禄七年に始めて印刷されたものではない。元禄七年より六十三年の寛永八年頃に(恵空誕生十三年以前)己に印刷されているのである。

即ち、寛永八年に京都の書林中島四郎左衛門によって真真系の人になる一本が刊行されたのである。この寛永八年の中島版は、「寛永八年辛未年二月吉日、中島四郎左衛門梓」と刊記ある本のみが知られて居り、有匡、訓点付本の最初の刊本であるが、この版本には、二種の異版がある。当版は最初無序本として寛永八年に中島が刊行したものであるが、間もなく、平基親の短序を付し、その後、此序者兵部卿三位平基親之作也是安芸守入道善禪房之父也上人在世飯依之弟子矣建暦二年九月八日開版之本載之広本亦入之鎮西兩家不用此序今家亦爾矣若為欲知者出之耳」(假名及訓